

手話言語と音声言語の統一記述

サマンサ・ラーリック

(ハワイ大学マノア校 [アメリカ])

要旨

言語記述とその保全は育ちつつある分野であるとしても、手話言語の記録と口話の記録の間には歴史的に分裂があった (Schembri 2010; Sze et al. 2012; Zeshan 2007)。しかし、双方の部分的なフィールドで得られた知見は、もう片方も借りる事ができた。本発表では、(1) 手話言語の研究者に口話の危機言語の領域で働くことを勧め、(2) 手話の危機言語に出会った口話の研究者に、パプアニューギニアの高地でのプロジェクトから得た成果を引き出すことを勧め、(3) 手話話者と聴者の間で、言語記述のトレーニングがどのように異なるかを、ある大学がスポンサーのプロジェクトで、言語の使用者に自身の言語を記録するトレーニングを行ったプログラムの成功と失敗に基づいて述べる。

手話言語と音声言語の統一記述は、言語記述の最も良い実践を進めるために、そして言語において、何がよくあることで、何が可能なのかを理解する上で決定的に重要である (Zeshan 2007)。それに加えて、口話と手話の両方に言及した包括的な言語記述が意味を持つコミュニティが数多く存在する。多くの言語学の研究者は口話か手話のどちらかに集中しているとしても、1つのプロジェクトで両方に言及する方法はなんとかなるものである。第一に、チームをベースにした言語記述へのアプローチは、しばしば実現可能な選択肢であるし、そこで異なるサブフィールドからの研究者が1つのプロジェクトで共同作業するならば、当該のコミュニティの範囲で2つ以上の言語に携われるかもしれない。もしチームでの仕事ができそうもなく研究者が手話についても口話についても専門知識も調査への関心もないならば、保存されてアクセスが可能なビデオの、ある言語や方言のレコーディングが、将来の調査を促すことになりうる。このようなレコーディングは、特に消滅の危機が大きいような言語においては、決定的に重要なものになることがある (Bird & Simons 2003)。本発表では、現在パプアニューギニアで進行中の口話の記録プロジェクトから得た知見に基づいて、このような状況におけるレコーディングの最も良い実践をお勧めする。この、ビデオをベースにした記録プロジェクトを通じて、以前には知られていなかった手話が見出され、この手話を記録に残すさらなる努力は現在も続けられている (Rarrick & Asonye 2017)。最後に、言語使用者に自身の言語を記録することのトレーニングすることは、文化的にも適切で効果も高い。

本発表では、ハワイ大学でのこのようなプログラムで、一緒に仕事する話者と手話話者との間を渡り歩いていた時に得たカリキュラム (Rarrick & Wilson 2015) に必要な改訂を加えて、危機言語の話者と手話話者と共にプログラムを立ち上げるための、最も良い実践について議論する。手話と口話を記録する努力の合体を通じて、我々の分野である言語の性質の理解を深め、言語記述の最

上の実践をもっとよくする機会がもたらされるだろう。本発表はこのような統一記述が、必要で実現可能であるということを示すことを目的としている。